

「……が尾道。」

東京発の夜行列車を乗り継いでお能ちゃんは尾道の駅に到着したばかりだった。

”海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい、汽車が尾道の海へさしかかると、煤けた小さい町の屋根が提灯のように、拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える。山は爽やかな若葉だ。緑色の海向うにドックの赤い船が帆柱を空に突きさしてる。私は涙があふれていた。”

林芙美子の「放浪記」の一説を思い出した。小説と同じ空間を共有しているそのひとときが心地よかった。

「東京から来たお能先生じゃね？わしゃ役場の職員で一柳と言います。あんたをお迎えにあがりました。遠いところからおおいでなされた。」

二つボタンのスーツを着た細身の中年の男に声をかけられた。もう少しこの幸せな時間に酔わせてほしかったなと思いつつも、

「ああ、よかった。何か目につく目印でもつけておけばよかったかな？なんて思っていたところですよ。お迎えに来ていただいて感謝いたします。」
と礼を言った。

「この地方じゃそげな姿をしよる人はおりませんけん。東京の人はちよつと違います。」

”坊っちゃん”のマドンナを意識した着物袴姿でやって来たが、洗練された都会のセンスで見抜かれてしまったのか？とお能ちゃんは思った。

黒と白を基調に白いフリルを飾ったゴスロリ調の袴と着物。七〇八十年後の秋葉原ならまだしも、当時の東京でも超絶に目立つ姿だった。

「尾道はお気に召しましたかね。」

「はい。河東碧梧桐、山口誓子、そして正岡子規に松尾芭蕉。多くの俳人に愛されてきた街です。千光寺はどちらでしょうか？」

「ほお、さすが文学士の先生や。千光寺は……ほれあのあたりの高台だ。」
と一柳は北東の方角を指さした。

”六時になると上の千光寺で刻の鐘をつく。ゴーンとなると直ぐゴーンと反響が一つ、又一つ、又一つ、それが遠くから帰ってくる。其頃から昼間は向島の山と山との間に一寸頭を見せている百貫島の燈台が光り出す。それがピカリと光つて又消える。造船所の銅を溶かしたような火が水に映り出す。”

「暗夜行路」の一説に出てくるお寺の鐘の音が今にも聴こえて来そうで、わずかばかりの平坦な街並みと背後の急な山々のコントラストをお能ちゃんは眺めていた。

東京においては味わうことができないこの感覚。来てよかったとお能ちゃんは思った。

「船を待たせているけん、港に向かいましょう。」

一柳はタクシーを呼び、お能ちゃんを乗せて港に向かった。

「県庁からの辞令は役場に届いているけん、こんまま島に直行でええんじやよ。」

「え？島？松山に行くんじやなかったんですか？」

「松山に行くなら呉か広島の方が便利やろな。島から松山に行くなら今治か西条まで漁船で行つて、そこから汽車がええじゃろ。」

東京を出る時に加奈子にももらった日傘もまださしていない。坊ちゃんが、マドンナが、道後温泉が遠ざかつていく。

「先生が教鞭をとっていた学校は水島第一国民学校といいます。」

「水島と言うと、平家物語の水島の合戦の水島ですか？」

「おお、さすがよう勉強なさっておる。じゃけん、あの水島は岡山県の倉敷じや。わしら平家方の末裔じゃけん、水島の合戦言うたら平家方が勝った戦いやつたしな。学校の名前はそうしたんじや。」

「では、島の名前が水島ではないのですか？」

「全然違います。獄門島です！」

港と言つても漁港の一角に誰がどう見ても漁船が一隻停泊しており、まさか？と思つたがタクシーはその漁船に向かつて黙々と走っていく。

逃げるなら今しかない。でも面白そう。好奇心と危機感が交差する中、船のそばまで歩み寄ってしまったお能ちゃんは、義経の八艘飛びを披露してしまい。船上の人となった。

”覚えきれぬ 島々の名や 夏がすみ”

江見水蔭(えみすいいん)が尾道から瀬戸内の島々を眺めて読んだ句である。季節は違ふが、いま目に入ってくる景色はその世界なんだなと、お能ちゃんは加奈子にももらった日傘をさして船の舳先に立った。

一の谷を追われて平家が屋島から壇ノ浦までこの瀬戸内の海を渡ったことなどに思いをはせていたが、屋島はもつと西ですし、壇ノ浦は山口県です。

船を操っていた船頭さんが釣れたばかりの魚を刺身にしてくれた。

「お能先生良かったら食べてみんかい。取れたての刺身じゃけん。」

おっかなびつくり一口入れたらそのおいしさに笑顔がこぼれた。

「島にはなんつちやないけどのお。魚と塩なら腐るほどあるよ。」

魚はともかく塩は腐らないだろう。と突っ込みたくなつたが、ふと目に入った島の海岸に藁を干した光景が気になった。

「あちらの島に見えるのは塩田でしょうか？」

「あれは伯方島。塩が名産じゃけん。」

いくつもの島が並んでいた。自分の行く獄門島もあの島々の中にあるのかな？と思つていたら、船は西に航路をとり島々から離れて行つた。

お能ちゃんたちが乗つた漁船をクロールで追いかけて来る青年がいた。やがて青年は漁船に並ぶとそのまま追い抜いて行つてしまった。

秋田から水泳の練習にやってきたネロさんであった。

壇ノ浦の合戦で平家が破れて程ない頃、八人の落ち武者と高貴な身分の少年がこの島に流れ着いた。この時少年は一本の宝剣を携えていた。八人の落ち武者はこの地で没したが、高貴な少年は成長すると宝剣を残して都へ赴いて行つた。島の高台には今も八人の落ち武者のお墓があり、八墓と呼ばれている。

船の上で一柳は後の時代に聞くことになりそうな島の伝説を話してくれた。

ほどなく船は小さな島の漁港に接岸して、お能ちゃんたちは船を下りた。船酔いなどしていないと思っていたが、陸に下りるなり平衡感覚を失って尻もちをついてしまった。船頭さんと一柳に助け起こされて起き上がったものの、まだ船に揺られているような感覚がまとわりついてまっすぐ歩くこともままならなかった。

波止場には水島第一国民学校の校長が迎えに来ていた。

「お能先生。遠くからお来て下さったぞなもし。」

校長の最初の言葉に「坊っちゃん」に出てくる方言と同じだ！とお能ちゃんは嬉しくなった。

挨拶を済ませているうちに平衡感覚がだんだんと戻ってきた。早速職場となる学校に向くことにしたが、波止場からそう遠くはなく、歩いて十分ほどの距離だった。

「小さな島に見えますが、第二、第三の学校があるんですね。」

第一国民学校と言うのだから当然第二、第三があるのだと思っていたお能ちゃんだった。

「いんや、島に学校はここだけだ。先生のように第二、第三があると思ってもらえると、この名前にして正解じゃったあ！わしが考えたんじゃ！」

一柳は嬉しそうに微笑んだ。

「人が住んでいるのもこん一角だけじゃあ。校長がいった。」

「それでは教師の数は？生徒の数は？」

「教師は私とあなただけじゃけん。生徒はこんど二人入学するから全部で十二人じゃな。」

「初等科・高等科はどうなってるんですか？」

「こんだけしか子供がおらんじゃけん。初等科や高等科やなんて硬いこと言わんぞなもし。」

現在の六・三・三制の教育システムは戦後からのことで、この時代は国民学校初等科が六年、現在の中学にあたる国民学校高等科が二年。義務教育は十四歳で終わった。

「私の前任の先生はどうなされたのですか？」

「三ヶ月ほど勤めたかのお。志願して兵隊になってまった。それから私一人になってまったから大変じゃったぞなもし。その前の先生も一年ほどで志願兵になってまったのおもし。」

新任教師が着任するなり兵役を選んで逃げていく。どんな島なんだ？とお能ちゃんは思った。

そんな話をしているうちについてしまった小さな分教所のような学校。玄関を真ん中に左右に二つの教室。多分片方は職員室だろう。二階には教室が二つ。昔はもつと生徒がいたのだろうか？

「とりあえずお能先生。今日の所は宿をとつてありますのでそちらにお泊りください。お疲れでしょうが歓迎の宴もありますので、この土地の魚をご堪能ください。」

二人はビョーイン坂と呼ばれる坂の麓にある漁師の宿“本陣”に向かった。

「こんな小さな村にも病院があるんですね。やはり台湾の先生がいらしているのでしょうか？」

この時代、日本の僻地の診療所には台湾人の医者が多く赴任しており、献身的な医療を行っていた。戦後、台湾人の医師はごく一部日本国籍を取得して九州などの離島に残っていたが、多くは台湾に返されてしまった。へき地医療の医師不足はこうして大きくなってしまった。

「ああ、ビョウインじゃったね。たしかにそうじゃなも。苗院と言うお寺があるから苗院坂(びょういんざか)言うて、医者がおるわけじゃないんじゃなもし。」

「いつまでまで娑婆をなめくさっているのか？とお能ちゃんは思った。

「じゃあ、お医者さんはいないけれど、お坊さんはいるんですか？」

「それもいないぞなもし。医者も坊さんも巡回で回ってくるんじゃなもし。」

校長の言葉に返す言葉が見いだせないお能ちゃんであった。

「苗院には今は神戸の先生が住んでいます。何でも薬屋さんじゃったけど結核患つてもうて、治療がてら温かいこの村に棲みついとるんじや。医者もなあ、港にちいつと大きな船が見えるじやろ。あれが巡回医療船じや。東京の先生が来る言うたら、他の島すつ飛ばしてこちに来てくれとんじや。夕方紹介するけんのお」

一柳の説明を聞きながら三人は地元漁師の経営する民宿にたどり着いた。これから始まる歓迎会の宴準備で近所の女たちも手伝いに来て賑やかな声が響いていた。

「なあんもない村ですが、温泉は豊富じゃけん、ゆくくり風呂につかってください。」

こんな孤島に温泉があることが不思議に思えた。

「温泉があるんですか？信じられない。」

「その昔、弘法大師さまがこの島を訪れた時に見つけなすった温泉じゃがなもし。」
落人伝説に弘法伝説。なんでもありの獄門島であった。

南東を向いた入り江に集落が広がり、入り江の背後には島の九割を占める照葉樹林帯の小高い丘がそびえていた。この照葉樹林帯が水を地下にため込み村の飲料水となり、はるか深くに潜った水が地熱で温められて島に噴き出しているのだろうか？

今で言うなら小学生、中学生にすべての科目を教えなければならぬと考えたお能ちゃんは苦手な理数系のことまで頭に浮かんた。

西日は海に沈むのではなく島の山陰に消えようとしていた頃、お能ちゃんはランプに明かりをともしゆらめく炎越しに夕焼けの海を眺めた。島に電気がないことをこの時は全然気にしていなかった。

「先生。いつまでのんびりしているんですか？もう宴会は始まっていますよ。」

え？なんで？と階段を下りて下に行くと、障子を外した広間に二十ほどのお膳が並び、宴はすでに始まっていた。

「おおく、あなたが新しく来た先生か。その辺の開いているところに座りんさい。」

上座の真ん中に座っていたのでおそらく村長と思われる小太りの男はすでに酒が回っていた。

お能ちゃんは席の一番下手に座り、紹介があるものか？と様子をうかがっていると、左隣

の年輩のおばさんが、

「遠慮せんで好きなもん飲みなされ。料理も煮物ならまだあるけん、おかわりしなされ。」

と薦めてくれた。呆気に取られてどうすればいいのか左右を見回していると、一柳が氣を利かせて徳利を持つてお能ちゃんの前に来てくれた。

「この島では自分で手酌で飲むのがあたりまえじゃて、遠慮はいらんからグイっといきなされ。」

「あのう、挨拶は？」

「そんな堅苦しいこと、この島じゃ必要ないけん。みんな顔見知り、みんな親戚。早く来た者から先に飲んで先に出来上がつてつぶれちまう。そういう島じゃ。ああ、横溝先生いらしたんか。さあ、ここが空いてますんでお座りください。」

「こちらが先ほど話した、苗院に住んでる横溝先生じゃ。こちら、新しく来た学校の先生じゃ。」

病み上がりの暗そうな顔つきをした男がお能ちゃんの隣に座ると、何も言わずに黙つて徳利片手に湯飲みに注いで飲み始めた。

「犬神家の御当主が見えていないようだが、お具合が悪いのかね？」

横溝は茶碗酒を口にしながら一柳に聞いた。

「巡回医療船の先生が往診に行つてるようじゃけど、どないな様子かはわかりません。今日は息子さんの清助さんが来てくれることになつとります。」

そこでまで話して一柳はお能ちゃんに向かつて説明した。

「あんたはまだなんのことかわからんじゃろが、この苗院坂を登つて、八人の落人のお墓がある八墓を越えると大きなお屋敷がおうてな、犬神様と言うこの島の盟主じゃ。松代、竹代、波代の三人娘がおつて、あんたの教え子になるからな。」

「松、竹、並ですか？」

「そうじゃ。松、竹、波じゃ。」

歌舞伎座の幕の間に出る仕出し弁当なら「松」竹」梅」だが、「並」と「梅」はどつちが上なんでしょう？とお能ちゃんは考えた。お吸い物の具だろうか？

「おとどしゅうございます(おひさしぶり)ー！」

二十歳前だろうか？深瀬とした青年が広間に入つてつてきた。犬神家の息子の清助だった。

「おお若旦那。おやさんどないしたんや？」

村長らしき小太りの男が聞いた。清助は正座して

「心配おかけしよるよ。ぎっくり腰でしばらく動けそうにありやせん。じゃけん、今度の春祭りはわしが神主つとめよるけんよろしくお願ひします。」

凜としたしつかりした青年だな。と、お能ちゃんは思った。

「清助。こつちに来んさい。こちらが松代、竹代、波代を教えて下さるお能先生じゃ。」

一柳は清助が西条の中学(現代の高校)に進み、今は松山の高等学校(現代の大学の教養課程)で勉強していることを説明し、春休みで帰省したら父親が怪我をしまいもうしばらくこの島にとどまっていることなどを話した。

「メツチエン先生ですかあ。」

メツチエンはドイツ語で(女性)を意味し、この時代の学生はこうしたドイツ語を会話の中に入れたがったものだった。

「お能と申します。清助さんはどんな方面に進もうとお考えなんですか？」

「本音はな。海軍兵学校に行きたかったん。ほやけど父が手え回して行けなかったんです。」

同級生が海軍兵学校に進み、一緒に行きたかったのだが、父親が受験させてくれず、今は水産の勉強をしようと思っていることなどを話した。

犬神家に往診に行っていた巡回医療の医師と看護婦と乗り組員が台所から手にお膳を持って入ってきた。

宴もたけなわになると村人は、それぞれお膳を持って勝手に広間の中を移動するので、お能ちゃんがいる下座は随分な空席が出てきていた。

先ほどまでお能ちゃん隣の隣にいた地元のおばちゃんは「いんでこーわい」とどこかに姿を消していたが、お能ちゃんには意味が分からなかった。「帰宅しますね」と言う意味だった。

「隣、空いとるけんか？」

看護婦らしき女性に声をかけられた。

「今度、教師としてこの島に来たお能と申します。」
と、自分から名乗ると、

「島まわりの看護婦をしよるほおでえと申しようわい。東京からおなご先生が来るとゆうけん、どんな人が来るか楽しみにしてたぞな。」

ほおでえナースは島まわりの巡回医療の話や、この島の風習などを楽しく説明し、お能ちゃんは何とかこの島でやっていけるような気がしてきた。

翌朝、巡回医療船は次の島に向かうために港を離れた。
お能ちゃんの島での生活が本格的に始まる朝だった。